

4-4-2.奄美大和村津名久焼の調査

渡辺 芳郎

A Research of Tsunagu-Ware in Yamato village, Amami Island

WATANABE Yoshiro

鹿児島大学法文学部

Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University

要旨

奄美大島大和村の津名久焼は明治8(1875)年に開窯した陶器窯であるが、その操業期間や製品内容については不明な点が多い。今回、窯跡において新たに発見された銘文入りの板状陶製品を調査したので、その検討結果を報告する。

はじめに

奄美大島大和村の津名久焼は、明治8(1875)年、京都の陶工で、当時、鹿児島田之浦窯で製陶に従事していた青木宗兵衛(三代金華山)が、鹿児島の工人たちとともに渡島し、また現地の人々を雇うことで開窯した陶器窯である(図1)。津名久焼についてはこれまでいくつかの論考が発表されているが(中山2010、橋口・松本2009、宮城1982、宗岡2002など)、その操業期間や製品内容については不明な点が多い。今回、窯跡採集の新たな銘文資料を調査したので、その検討結果を報告する。

方法

2018年8月7日、津名久焼窯跡採集の板状陶製品(大和村教育委員会保管)について事前調査を行い、概要を把握した後、2019年8月22・23日に精査、計測、写真撮影を実施した。そして板状陶製品の残存形状から本来の形態を復元するとともに、記された銘文を文献史料の記述と比較した。

結果と考察

板状陶製品(図2)は3つの破片よりなるが、接合時の法量は42.2×28.6cm、厚2.7~3.8cmをはかる。表面には計11行で人名、年号などが刻字されている。表面は丁寧になでて平坦面を作るが、裏面の調整は粗い。表面の左右・下端の角は面取りしている。上・下端は焼成前に切断され、丁寧になで



図1 津名久焼窯跡の所在地

整えられている。裏側の左右端は斜め方向に削られ接合痕が残る。本来は直角に粘土板が接合されていたと推測される。また同じように端部が斜めに削られた板状陶製品の破片が複数、本窯跡で採集されている。このことからこれら板状陶製品は、本来、空洞の箱状構造物であったと考えられる。

銘文に記された人名は青木宗兵衛を含め計7名で、それらは、明治18(1885)年の薩糸織物陶漆器共進会の際に提出された「陶器功勞者履歴」(『薩陶製菟録』所収)の青木宗兵衛の項に見られる奄美渡島工人名とほぼ一致する(ただし「同姓(=森尾)直次郎」の名は文献にはない)。明治8年渡島は文献と一致するが、文献では8月とあり、板状陶製品は旧暦表記であろう。また同一個体と推測される別の板状陶製品(13.8×14.2cm、厚2.4cm)には「口豊/萩友/三代静」とあり(図3)、これらの人名も前掲「陶器功勞者履歴」に奄美の工人として記されている。

鹿児島本土では窯場において「山神」など祀った石塔が建てられることがあるが、一部に陶製もある。たとえば日置市美山の沈壽官窯に残る弘化3(1846)年銘と文久元(1861)年銘の陶製祠などである(渡辺2008)。板状陶製品から復元される箱状構造物は、その形状と、表面に年号、窯場関係者の氏名などが刻まれていることから、上記の石塔や陶製祠と同様、窯場に建立された祠もしくは開窯の記念碑の可能性はある。

引用文献

- 中山昭二 2010. 第六章 津名久焼. 「大和村誌」, 415-422. 大和村.
- 橋口亘・松本信光 2009. 奄美へ渡った薩摩焼と津名久焼. 「海が繋いだ薩摩-琉球」, 11. 南さつま市坊津歴史資料センター輝津館. 南さつま.
- 宮城篤正 1982. 津名久焼. 「日本やきもの集成 12 九州 II・沖繩」, 133-134. 平凡社 東京.
- 宗岡克英 2002. 奄美大島大和村の津名久焼についての考察-記年銘資料の紹介を中心に. 「からから記念号」, 155-159. 鹿児島陶磁器研究会. 鹿児島.
- 渡辺芳郎 2008. 薩摩焼窯神石塔小考. 「九州と東アジアの考古学-九州大学考古学研究室 50周年記念論文集-下巻」, 697-712. 九州大学考古学研究室 50周年記念論文集刊行会. 福岡.

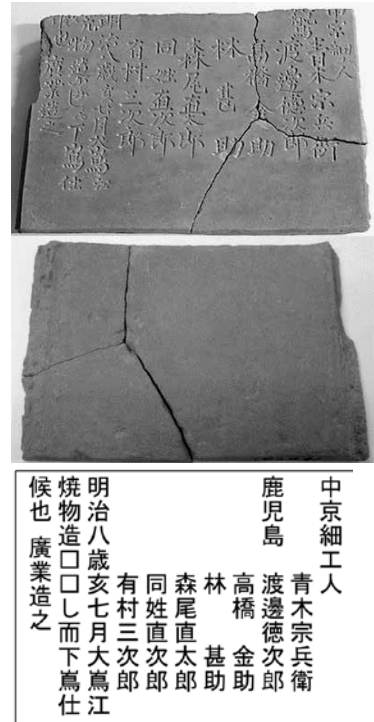


図2 津名久焼窯跡採集の板状陶製品とその銘文



図3 津名久焼窯跡採集の板状陶製品